

書評・紹介

Paul Harrison : The Samādhi of Direct  
Encounter with the Buddhas of the  
Present, Tokyo, 1990.

桜 部 建

1

Australian National University に一九七九年八月提出された著者 P・ハリソン氏の学位論文

The Pratyutpanna-buddha-sammukhāvasthita-samādhi-sūtra; an Annotated English Translation of the Tibetan Version with Several Appendices.

は、著者が一九七六—八一年 A.N.U. で行なった研究に基づいて成されたもの。その研究の指導者は J.W. de Jong 教授であり、この経典を研究の主題にとり上げたのもドゥヨング博士の示唆による、という。いま、この書はその学位論文に修正加筆し、それに著者が先に公けにした経のチベット語訳の校訂本文 The Tibetan Text of the Pras, Tokyo, 1978 に対する訂正を附加したものである。

著者の関歴については The Tibetan Text of the Pras の最後のページを参看。

2

著者の目指すところは、大乘仏教の起原とその初期の展開を解明することであり、その目的を達成するための一つの道程として、大乘経典の最も初期の漢文訳についての完璧な研究を、と著者はかねて企図していた、という。紀元一七〇—一九〇年のころ洛陽においてなされた支婁迦讖（およびかれに繋がる人々）の訳業は、年代の明らかなものとしては最も早い大乘文献のいくつかをわれわれに遺したから、それらに対する研究は、大乘の初期の展開にかなり光をあてるし、一方、中国仏教の始源にも光をあてることになる。

そのためには、先ず、疑いなく支識訳と見得べきものを確認し、次にその本文を正確に読解するという順序が踏まなければならない。そして（支識訳の原文に当るものの現存するのは僅少であるから）その本文の正確な読解のためにはそれに対応するチベット語訳の利用が必須である。

著者の抱懐するこのような「支婁迦讖プロジェクト」が最初に生んだ成果として、チベット語訳般舟三昧経の研究がここに学界に提供された。『般舟三昧経』（大正大藏経第四一八）は、『道行般若経』と並んで、躊躇なく支識訳と断定し得るものである。

この経は、僅かな梵文断片が獲られている他は、支識のものを初出とする漢文訳四本とチベット語訳一本（およびモンゴール語訳一本）として存在している。諸本対照の上で支識訳般舟経を正確に読解するという著者の当面の目的に向けて、その予備

作業として先にチベット語訳の校訂本文がまず出され、次いで、いまその英語訳註が公けにされたのである（著者はすでに、進んで支識訳の英語訳をも完成しており、遠からず仏教伝道協会から刊行の運びになる、という）。

チベット語訳本文の校訂作業は、底本にデルゲ版を用い、ナルタン・ベキン・ラサの諸版をもって校合した。それは「辞書や文法に合致させるため」に諸版中に存する古い読みをみだりに改めるようなことはしないという慎重な配慮をもって、なされた。今回刊行の訳註に添えられた「附録C」の中で、著者はラダックの Stog 宮所蔵本 (The Tog Palace Manuscript of the Tibetan Kanjur, Leih, 1975-80 所収) をも用いて、さらに古体に復するよう修正の努力を加えている。チベット語訳本文の校訂について著者のとったこのような方針およびその結果について言挙げするほどの知識を私は有しない。別に論者のあらんことを庶幾する。

ハリソン校訂本は、チベット語訳般舟經全二六章のそれぞれを、さらにいくつかの小節に分ち、合計二二九節に細分している。巻末に、各節ごとを漢文訳四本と対照した詳細なコンコードダンスが備えられ、さらに各章を漢文訳四本における章の区分と比較配列した一覧表が附せられているから、チベット語訳本文と著者の英訳文や漢文訳異本との対照をなすに至便である。総じて、ハリソン氏の文献学的手法はよく行き届いた、そして綿密なものであるが、その一端はこのコンコードダンスや一覧表にも示されていると思う。

### 3

校訂テキストに続いて出された今回の訳註は、序論と本文訳註と四篇の附録とビブリオグラフィとから成る。

序論は、I 諸本大観、II 般舟經（以下、「經」）の内容とその歴史の意義、III 「經」の構成、IV この英訳についての概説、の四章に分かたれる。

I は、現存の「經」の諸本を簡単に紹介し、漢文訳よりの國訳（訓読）にまで及ぶ。II では「經」の成立年代の推測、「經」の内容と性格、「經」の流伝の状況などが論じられる。III は、チベット語訳の叙述を追ってその要約を掲げている。IV では、大乘經典の「原典」のもつ流動的性格と仏典チベット語訳の特殊性を論じ、著者の採った翻訳方法や訳文の表現法を説明している。

著者の所論は明快で、そのほとんどは我々を首肯せしめるし、しばしば新しい興味深い見解を提示する。たとえば、「經」の本文には二つの形（チベット語訳のそれと漢文訳諸本のそれと）を区別し得るが、その実質的な相違はただ（チベット語訳の）第十九章以下（三巻本『般舟三昧經』でいえば無想品第十一以下）にのみ見られる、と論ずる (p. xxxiii) とき、あるいは、大乘諸經論に般舟三昧の名がしばしば現われていながら「經」自体の引用やそれへの関説は『智度論』『十住毘婆沙論』以外に見えぬことや、「經」がのちに大集經中に編入されたことなどから、「經」と中央アジアとの格別な関連を示唆する (p. xxxiii-xxxv) とき

である。

「経」の性格を論じて、著者はいう。「経」に説かれる般舟三昧とは空思想に立って展開された仏随念の一形態である。それを開示する「経」は、浄土経典の一つと見らるべきでなく、むしろ般若経類により近い性格をもち、般若思想と浄土思想との間の緊張を解く一視点から書かれている、と。

いかにも空思想を別にして「経」の所説は正しく理解できない。「経」を浄土経典の「類」と見るべきでないという点も、全く著者の説くごとくであると思う。しかし、それにもかかわらず、故色井秀護師によって力説されているような考え方、すなわち、般舟三昧の実践は、もと、インド仏教初期の在家者の間に高まった見仏(仏との現前の値見)への願望に由来するもので、従って本来は空思想と必然の関わりにあったのでないとする考え方、それが大乘仏教の中で空思想の発展に伴って次第に「空」の觀念との結びつきを強めたとする考え方、はやはり考慮に値いするであろう。もちろん、色井説のように、そのことを根拠にして一巻本『般舟三昧経』を三巻本の先行形態であると主張するのは確かに誤りであるが、一方では、『大阿弥陀経』『阿閼仏国経』『般舟三昧経』などの間の先後関係を論じたり無量寿経諸本の間のを論じたりする場合、それら諸経・諸本の中に見られる空思想の有無が、あるいは空思想の発達段階が、しばしば問題とされている(池本、静谷氏らの所論)のである。

なお、著者が「経」の成立年代を論じ(p. xvii, p. 61)、「後五百年」の句(*paścimāyān, pañcaśatyām, 500*)『金剛般若』

にも『法華経』にも現われる)の存在(実は「経」の支識記にその句は見えない)からその上限を後一世紀と想定するのは、私にはやや速断のように思われる。また、善導の『般舟讚』を、韻文の作品ながら「経」に対する一種の釈論を成すものというように述べている(p. xxvii)のは、当たらない。

#### 4

この書の主要部分を占めているチベット語訳よりの英文訳は、著者のすぐれた読解力と綿密な手法により、ほとんど逐語訳的に、しかも明快に、なしとげられてゐる。‘to make the Prās accessible to the scholarly public in a readable and accurate translation’ という著者の意図をよく達成しているものと言えよう。

「それに必要な限り」(と著者はいう)、常に漢訳諸本と対比し、他の諸書をも博搜して、語句の意味や用法を究明している。pratyutpannabuddha-saṃmukhāvasthita に ついて p. 3-5 に「賢護等の十六正土」について p. 6-8 に、「不見頂相」について p. 68-69 に、そのような論究の好例を見る。

著者の漢文読解の能力の高さやサンスクリット語・チベット語との対比考察の鋭さは、この書のいたるところでそれを感じしめられる。固有名詞の原形推測の見事な手際などもその一例で、「和論調」などから Varuṇadeva を (p. 12)、「頼毘羅耶」などから Rāsmirāja を (p. 123)、「惟斯岑」などから Viśeś-agāmin (p. 177)、「抵羅首羅髻沈」などから Dīdhasūrotama

を(p. 176)推定している。

時には、しかし、そのような推測に行き過ぎと思われることもある。例えば、著者はある箇所(大正一三、九〇四b29)での支識の用語「精進」を、他の諸本との比較からして、*śūdrā*の訳語と見られるとするのであるが、その直前の箇所(九〇四b27)に同じ「精進」の語が用いられていてそれは著者によって *śūdrā* の訳語と見られているところからすれば、この推定は恣意的といわなければならないであろう。

5

附録Aは諸本の上に見られる「経」の「流動」の歴史を追究する。この問題については、もっぱらわが国の学者らによって、長らく様々な論議が重ねられて来ているが、チベット語訳をも含めて取扱い問題点をこまかに解明したハリソン説は従来の論に比して一頭地を抜くものである。従来の、ことに初期の、論議があまりにも経録の記載に関わり過ぎ本文の解釈がそれに引きずられた観があるのを批判し(7. 2. 2)、著者は諸本の本文そのものの着実な比較検討によって結論を導き出そうとする。その結果を摘記すれば――

(1) 一七九九年、支婁迦讖によって「経」の初訳(当初、二巻のうち、三巻、十六品)が出された。いま麗版に収められている三巻本『般若三昧経』の基になったものである。これは劈頭の因縁を語る部分が簡略であり、偈頌の部分も散文に訳出している。

(2) 二〇八年、(1)の改訂が行われ、因縁の部分には筆が加えら

れ、偈頌の部分は新たに韻文に訳し直された。だから、改訂は、単に訳文をより洗練されたものに改めたというにとどまらず、その改訂の際に新たな原典が、あるいは(今は喪われている)別な翻訳が、参照されたかと思われる。いま宋・元・明三版に収められている三巻本の形態がそれである。

(3) 不完本『披陁菩薩経』の訳出は遅くとも後三世紀を降らない。この時代、あるいはなお他にも「経」の訳出があったかも知れない。

(4) 多分四―五世紀のころ、(2)の抄本が作られた。われわれの有する一巻本『般若三昧経』がそれに当る。抄出に当って、*a small amount of extra material* が取り入れられた(と著者はいうが、三巻本に見えない特異な形態の偈頌が加えられたり、訳語の変更がなされたり、かなりな改変がそこには見られる)。そのころ、二巻本は誤って竺法護訳と考えられるようになっていたのでこの抄出本の方が支識訳に擬せられた。この一巻本は七世紀前後に中国本土では喪われたようである。そしていかにしてか麗版に収められて今日に伝えられた。

(5) 五九五年、闍那崛多是新たに『賢護分』(大正第四一六)を訳した。これは「経」を大集經の一構成分と見ている。

(6) そこで、八世紀まで、中国では「経」について三本が行われていたことになる。(2)の三巻本(これは、また支識の訳に帰せられるようになった)と(3)の『披陁菩薩経』と(5)の『賢護分』とである。

(7) 九世紀初め「経」のチベット語訳が出された。この本は漢

訳諸本に比して改変が見られ、新たな要素が加わっている。

(8)初訳の三巻本(すなわち(1))は断片的にもせよ伝えられていて、麗版の編纂者はそれを(2)の改訂本と合採して麗版所収の三巻本を成した。

右のような「シナリオ」は、私には、(8)を除いて、蓋然性の高いものと思われる。

6

附録Bは断片として存する「経」のサンスクリット本を、『賢護分』および三巻本『般若三昧経』の対応部分と対照し、各本の英訳を掲げて、諸本間の流動のいかに大きいかを示している。これら断片を含んでかつて完本として存在していたであろうサンスクリット本は、われわれの知る漢文訳の諸本ともチベット語訳の一本ともまた別な、一つの本文の流れであったと考えられる。結局、最初の漢文訳が支婁迦讖によって成されたその時点ですでに、「経」はいくつかの異本の流れをなして流通していたのであろう、と著者は推測している(p. 301)。一般に散文よりも韻文は変動しにくくそれだけ古体を保持することが多いと考えられるが、「経」にあっては諸本の韻文の部分においてすらテキストの変異は著しい(その現存する梵文断片は大部分が韻文の簡処である)。この、ごく少部分しか得られていないサンスクリット本の形態の成立年代を推定することは困難であるが、『賢護分』とは最も近似しており、そして散文の部分で『賢護分』の方に増広が認められるので、サンスクリット本の成立

は『賢護分』の原本本文の成立よりやや先立つと見るべきでないか(断片として存する写本が作られたのは闍那嚩多の時代よりも後のことであるとしても)、というのが著者の見解である。

「経」の、というよりもいくつかの古い大乘經典に共通な、本文の「流動」性について、著者は繰返し触れている(p. xxxix, p. 273, p. 301)。それは確かに、口誦伝承によった、そして在家大衆に広く迎えられた、それらの經典がもつ特質の一つである。時には、その流動性がむしろ開展性、成長性と呼ばれてよいほどでもある。『無量寿経』諸本の場合、アングリマールを主人公とする諸経の場合、などと比較して考察して見るのは興味あることと思われる。

附録Cは上記のごとくチベット語訳の校訂テキストの補正。附録Dは語彙。巻末に詳細なビブリオグラフィが添えられていて、著者が先行の諸研究を広く渉猟していることが知られるが、中でも、日本語で書かれたものを著者ほどに多く、丁寧に、正確に、そして鋭く批評的に、読んでいる(そのことを示す記述は、この書の序論・本文脚註・附論の中のある処に見られる)例は、シユミットハウゼン氏らを除けば、日本国外においてなお稀なのでなからうか。